

「アートキャラバン 2019

IN CAMBODIA ～カンボジアプロジェクト 2019 夏～

「百聞は一見に如かず、百見は一労作に如かず」

今夏も多くの皆様のご協力により、カンボジア「ひろしまハウス」(貧困家庭の児童に対する教育支援を実施するNGO)における「カンボジアプロジェクト2019夏」を無事に終了することができました。

初めて出会う、年齢も、職業も、キャリアも異なる8名の仲間が、「カンボジアの子ども達に心を届けよう」という一つの共通目標のもとに集まり、2019年8月7日(水)・8日(木)の2日間に渡るワークショップを実施しました。

「ひろしまハウス」の訪問は昨年に続いて今回で3回目です。約50名の子ども達がこの日を楽しみに待っていてくれました。



▲ マイディスク作り



▲ 開会式で「鳴子踊り」を披露してくれました。

今回は「鳴子踊り」「日本を知ろう」「和紙を染めよう」「マイディスクを作ろう」「ディスクを使って遊ぶ」の5つのカリキュラムを用意しました。

1日目は「鳴子踊り」から始まりました。オープニングでは私達への歓迎の意味を込めて、子ども達が息の合う演技を披露してくれました。(子ども達は2018年12月に初めて「鳴子踊り」と出会い、以後我々が帰国後も週1回のクラブ活動として練習を続けました。)

「日本を知ろう」と題して、子ども達へ事前に実施した「日本と聞いて思い浮かぶもの」に関するアンケートの結果から「富士山」を選び、動画を制作し、持参したものを鑑賞しました。「富士山」の景色は、写真で見ると美しいけれど、実際の登山路は険しい岩がむき出しであることに子ども達は驚いた様子でした。また、苦しい思いをして、頑張って登り切った者のみが「ご来光」を拝み、達成感を味わうことができることを知りました。

「和紙を染めよう」では、色の3原色である赤(マゼンタ)、青(シアン)、黄(イエロー)の染料で和紙を染めました。和紙を折ってインクをつけると、展開したときに様々な模様ができることや、染料が混ざると、色が変化していくことを学びました。混ざりあった色彩や、予想外の模様の出現に興味津々で、飽きることなく集中して制作に取り組んでいました。



▲ きれいな模様が染め上がりました。

2日目は、「マイディスクを作ろう」(コラージュによる紙皿ディスクの装飾)から始まりました。

前日に制作した「染め和紙」と紙皿を用いて「マイディスク」の制作を行いました。紙皿1枚を投げて見



▲お昼は「ひろしまハウス」の子ども達と一緒においしい給食をいただきました。



▲頑張って作ったマイディスクとともに

せ、「なぜ飛ばないのか、どうすれば飛ぶのか」の検討を行いました。「重くすれば飛ぶのではないか」という仮説を導き出し、紙皿を重ね貼りしてベースとなるディスクを制作しました。子ども達は思い思いに装飾を施し、色鮮やかな「オンリーワン」のフライングディスクを完成させました。

続いて、「ディスクをつかって遊ぼう」(競技大会の実施)を行いました。前回(2018.12)に引き続きフライングディスク、アキュラシー競技を行いました。

今回はプラスチック製のフライングディスクと、マイディスクあわせて10枚をアキュラシーゴールめがけて投げ、ゴールの通過枚数を競いました。見事ゴールを通過すると「ナイスゴール!」、残念ながら外すと「がんばれー!」というかけ声で応援にも熱が入りました。成績上位者には、メダルを授与しました。

また、最後に参加者全員に「(株)遊都」の都筑会長から日本から持参いただいたお菓子が手渡されました。珍

しい日本のお菓子を大事そうに受け取っていました。

2日目のフィナーレではサプライズで「ひろしまハウス」の子ども達が日本語で「フレンド」という曲を合唱してくれました。子ども達もスタッフも目から大粒の涙を流し、肩を抱き合う姿が見られました。私にとって忘れられないシーンとなりました。



子ども達とのふれあいで

今回私は、チーム「アジアの風」の一員として、カンボジアの子ども達の教育支援をしている「ひろしまハウス」へのボランティアに参加しました。そこでの私の役割は、班長として子ども達の作業をサポートすることでした。

最初は言葉の通じない子ども達にどのように接して良いか分からず不安でしたが、子ども達の元気がその不安を解消してくれました。子ども達と触れ合い、たくましさにとっても驚きました。生き生きと、また、とても真剣に楽しそうに授業を受けている姿を見て、あんなにも頑張っている子ども達が、必要な教育を受けられないということにとっても不条理を感じました。「ただ住む国が違うだけで、こんなにも違うものなのか」と、自分の子どもの頃と比べ、どんなに自分が恵まれていたか、思い知りました。

彼らへの支援の必要性と自らの非力さを痛感させられる体験でした。

まだまだカンボジアには、援助が足りないところが沢山あります。今後は、自分のできることを少しでもやって行きたいと思います。

日本大学3年 浅田 祐市

